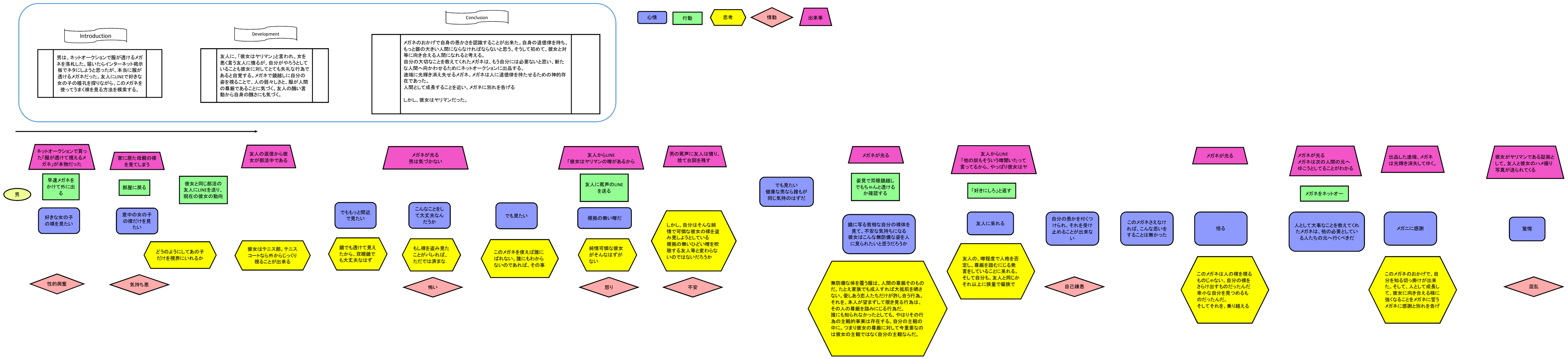

Introduction

男は、ネットオークションで服が透けるメガネを落札した。届いたらインターネット掲示板でネタにしようと思ったが、本当に服が透けるメガネだった。友人にLINEで好きな女の子の瞳孔を探りながら、このメガネを使ってうまく裸を見る方法を模索する。

Development

友人に、「彼女はヤリマン」と言われ、女を悪く言う友人に憤るが、自分がやろうとしていることも彼女に対してとても失礼な行為であると自覚する。メガネで鏡越しに自分の姿を視ることで、人の弱々しさと、服が人間の尊厳であることに気づく。友人の醜い言動から自身の醜さにも気づく。

Conclusion

メガネのおかげで自身の愚かさを認識することが出来た。自身の道徳律を持ち、もっと器の大きい人間にならなければならないと思う。そうして初めて、彼女と対等に向き合える人間になれると考える。
自分の大切なことを教えてくれたメガネは、もう自分には必要ないと思い、新たな人間へ向かわせるためにネットオークションに出品する。
途端に光輝き消え失せるメガネ。メガネは人に道徳律を持たせるための神的存在であった。
人間として成長することを近い、メガネに別れを告げる

しかし、彼女はヤリマンだった。

心情
行動
思考
情動
出来事

男

ネットオークションで買った「服が透けて視えるメガネ」が本物だった

早速メガネをかけて外に出る

好きな女の子の裸を見たい

性的興奮

家に居た母親の裸を見てしまう

部屋に戻る

意中の女の子の裸だけを見たい

気持ち悪

彼女と同じ部活の友人にLINEを送り、現在の彼女の動向

どうのようにしてあの子だけを視界にいれるか

友人の返信から彼女が部活中である

彼女はテニス部。テニスコートなら外からじっくり視ることが出来る

でももっと間近で見たい

鏡でも透けて見えたから、双眼鏡でも大丈夫なはず

メガネが光る
男は気づかない

こんなことをして大丈夫なんだうか

もし裸を盗み見たことがバレれば、ただでは済まな

怖い

でも見たい

このメガネを使えば誰にばれない。誰にもわからないのであれば、その事

友人からLINE
「彼女はヤリマンの噂があるから

友人に罵声のLINEを送る

根拠の無い噂だ

純情可憐な彼女がそんなはずがない

怒り

男の罵声に友人は憤り、捨て台詞を残す

しかし、自分はそんな純情で可憐な彼女の裸を盗み見しようとしている
根拠の無いひどい噂を吹聴する友人等と変わらないのではないだろうか

不安

でも見たい
健康な男なら誰もが同じ気持のはずだ

メガネが光る

姿見で双眼鏡越しでもちゃんと透けるか確認する

鏡に写る貧相な自分の裸体を見て、不安な気持ちになる
彼女はこんな無防備な姿を人に見られたいと思うだろうか

無防備な体を覆う服は、人間の尊厳そのものだ。たとえ家族でも成人すれば大抵肌を晒さない。愛しあう恋人たちだけが許し合う行為。
それを、本人が望まずして覗き見る行為は、その人の尊厳を踏みにじる行為だ。
誰にも知られなかったとしても、やはりその行為の主観的事実は存在する。自分の主観の中に。つまり彼女の尊厳に対して今重要なのは彼女の主観ではなく自分の主観なんだ。

友人からLINE
「他の奴もそういう噂聞いたって言ってるから、やっぱり彼女はヤ

「好きにしろ」と返す

友人に呆れる

友人の、噂程度で人格を否定し、尊厳を踏むにじる発言をしていることに呆れる。
そして自分も、友人と同じかそれ以上に狭量で偏狭で

自分の愚かを付くつけられ、それを受け止めることが出来ない

自己嫌悪

このメガネさえなければ、こんな思いをすることは無かった

メガネが光る

悟る

このメガネは人の裸を視るものじゃない。自分の裸をさらけ出すものだったんだ
卑小な自分を見つめるものだったんだ。
そしてそれを、乗り越える

メガネが光る
メガネは次の人間の元へゆこうとしてることがわかる

メガネをネットオー

人として大事なことを教えてくれたメガネは、他の必要としている人たちの元へ行くべきだ

出品した途端、メガネは光輝き消失してゆく。

メガニに感謝

このメガネのおかげで、自分を知る切っ掛けが出来た。そして、人として成長して、彼女に向き合える様に強くなることをメガネに誓う
メガネに感謝と別れを告げ

彼女がヤリマンである証拠として、友人と彼女のハメ撮り写真が送られてくる

驚愕

混乱